

# (翻訳) 朝鮮半島青銅器時代の装飾石剣に対する検討

黄 昌漢\*

訳：平郡達哉\*\*

A Study on the Ornamental Groundstone Daggers of the Bronze Age in Korean Peninsula

Chang-han WHANG

(Translated by Tatsuya HIRAGORI)

キーワード：朝鮮半島、青銅器時代、装飾石剣、毀器、儀礼

## はじめに

朝鮮半島青銅器時代の遺跡からは多様な石製遺物が出土している。これを基に石器研究が進められているが、土器研究に比べ相対的に停滞した状況であるといえる<sup>(1)</sup>。しかし近年、石器の系統はもちろん使用痕跡分析(孫峻鎬 2005)、製作技法(朴泰範 1998、黄昌漢 2004)、社会的意味の分析(裴眞晟 2006)など多様な方面から研究が試みられていることは望ましい傾向である。

青銅器時代の石器のうち最初に研究が試みられたのは石剣と石鏃であろう(有光 1959、任世権 1977、崔盛洛 1982)。これは石剣と石鏃が各遺跡で多数出土しているだけでなく、時間性および空間性を反映する重要な遺物と認識されてきたためであろう。石剣の中で有柄式石剣は朝鮮半島を中心に発達しており、出土資料が少なかった時期には副葬用として

のみ認識されることもあった。しかし、次第に住居址など生活空間での出土例が増加したことで、実生活で使われた可能性についても想定できるようになった。また、剣が持つ象徴性は社会的地位のみならず儀礼的にも重要な部分を占めている。青銅器時代の墳墓で石剣と石鏃がセットをなして出土することが多い理由もその重要性和象徴性を反映しているためであると考えられる。したがって、石剣の研究は分類や編年など基本的な研究から脱して、多角的で体系的な研究を通してその遺物が持っている総体的な文化の背景と発展過程を示し、当時の文化と社会像を明らかにする努力がなされなければならないと指摘されている(李栄文 1997)。

朝鮮半島出土磨製石剣の研究はこれまで多くの研究者によって試みられてきた(有光 1959、金昌鎬 1981、沈奉謹 1989、安在晧 1990、李栄文 1997)。最初の研究は有光教一に

---

\*蔚山文化財研究院

\*\*島根大学法文学部社会文化学科

よるものである(有光 1959)。氏の研究は朝鮮半島石剣研究の嚆矢という意味はあるが、朝鮮半島出土磨製石剣の起源が細形銅剣の模倣にあるという誤謬を犯すなど少なくない混乱をもたらした。以後、磨製石剣に対する研究が進められてきたが、型式分類や共伴遺物の検討を通じた体系的な研究は沈奉謹、安在喆、李栄文によって行われた。沈奉謹の研究は石剣を型式分類し、石鏃、赤色磨研土器などの共伴遺物を検討して段階を設定したことが注目され(沈奉謹 1989)、安在喆はこれを基に身部の変化より柄部の属性が時間性を反映するものと把握して型式を分類し、遺物の共伴関係を検討した(安在喆 1990)。李栄文は全羅南道地域の資料を中心に石剣の機能なども含めて幅広く検討した(李栄文 1997)。近年の研究成果としては近藤喬一と朴宣映の論考がある。近藤喬一の研究では小黒石溝8501墓から出土した銅剣資料を二段柄式石剣の祖型と設定した点が注目される(近藤 2000)。朴宣映は石剣の意味が武器や身分の象徴にのみ限定されず、時期によって象徴的な性格から儀礼的な性格に変化するという見解を提示した(朴宣映 2004)。

本稿ではこれら先学たちの研究成果を基に青銅器時代の装飾石剣について集中的に検討してみることにしよう。装飾石剣とは柄部に把頭があるものやここに円形の小穴が陰刻されたものである。装飾石剣は出土量が少ないが、出現期の石剣との密接な関係および地域性そして、意味的な側面から細密に検討してみる余地があるものと考えられる。そのためにまず装飾石剣について定義し、出土遺跡の検討を通して出土様相を調べてみよう。次に、型式分類を実施した後、段階設定を行い既存の編年研究と対比して時空間的な位置を検討しよう。最後に装飾石剣の機能と意味につい

て既存の研究成果を批判的に受け入れながら筆者の見解を提示してみることにしよう。

## 1. 装飾石剣の定義と祖型

### (1) 装飾石剣の定義

装飾石剣は図1のように把頭があるものではないものに大別される。まず、把頭が附着したものは全て装飾石剣に含ませ<sup>(2)</sup>、把頭のないものは柄部に円形の小穴が陰刻されたものを装飾石剣と命名することにしよう。装飾の辞典的な意味は飾るとか美しく装うという意味であるが、古代においては身分や階層によって差別化されるだけでなく、多種多様な意味を内包している。したがって、装飾石剣という言葉は用途のみならず意味的な側面も包括できる用語であると考えられる。

### (2) 装飾石剣の祖型

磨製石剣の祖型問題は石剣研究の開始と共に提起された<sup>(3)</sup>。まず嚆矢となったのは有光教一の研究であり、氏は細形銅剣起源説を提示した(有光 1959)。しかし、その後資料が増加するとともに有光の主張に問題があることが明らかになると、細形銅剣より古い時期の銅剣から起源を求めたり銅剣祖型論自体を否定する方向に論議が展開した。銅剣祖型論の嚆矢は金元龍の論考であるが、氏はスキタイ系統のオールドス式銅剣を起源とし(金元龍 1971)、全栄来は完州上林里出土の桃氏剣を根拠に中国式銅剣起源説を主張したが(全栄来 1976)、その後中国式銅剣と琵琶形銅剣を模倣した石剣が存在したとみた(全栄来 1982)。金邱軍は琵琶形銅剣と二段柄式石剣の形態的な比較研究を通して琵琶形銅剣起源説を主張した(金邱軍 1996)。近年の研究としては近藤喬一の論考が注目されるが、氏は小黒石溝8501墓出土銅剣(図2)の資料を二段柄式石剣

の祖型と設定した (近藤 2000)。これまで提示された資料の中で形態的側面からは銅剣模倣説が最も具体化されていると考えられる。これとは対照的に銅剣祖型論を否定する見解として金用環の論考がある (金用環 1964)。また、田村晃一は琵琶形銅剣と桃氏剣に起源があるという二元論的な見解を提示した (田村晃一 1988)。

これまでの先学たちの研究成果からみると、筆者も磨製石剣は銅剣を模倣した可能性が高いと考える<sup>(4)</sup>。したがって、装飾石剣は銅剣を模倣した磨製石剣に小穴の装飾的な意味が結合して発生したものであり、地域色を有する独特な石剣と推定できる。この点については後の章で検討してみよう。

## 2. 装飾石剣出土遺跡の検討

### (1) 清道 陳羅里遺跡 (嶺南文化財研究院 2005) (図 3)

装飾石剣が出土した 71 号住居址は細長長方形住居址で、いわゆる館山里式住居址 (安在皓 1996) である。内部から 2 個の無施設式炉址と周溝などが確認された。規模は全長 1,166 cm、幅 379cm、深さ 30cm である。装飾石剣は南長壁付近で身部と柄下部が欠損した状態で出土した。石剣は二段柄式で柄上部に横 2 列で小穴が陰刻されている。法量は残存長 8.5 cm、幅 4.2cm、厚さ 1.0cm、重さ 41g である。岩質は黒色泥岩である。石剣が廃棄されるまで磨研して使用されたものと推定される。したがって、この石剣は住居址で使われた後、住居の廃棄段階で入れられたものと考えられる。

石剣との共伴遺物には口唇刻目二重口縁短斜線文土器、壺形土器、血溝を持つ磨製石鏃片などがある。

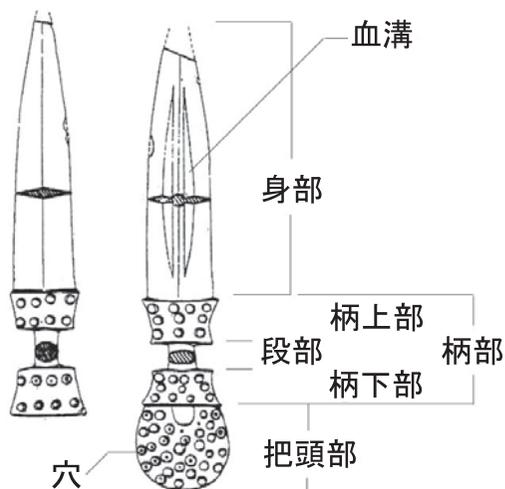


図 1 装飾石剣の各部名称図

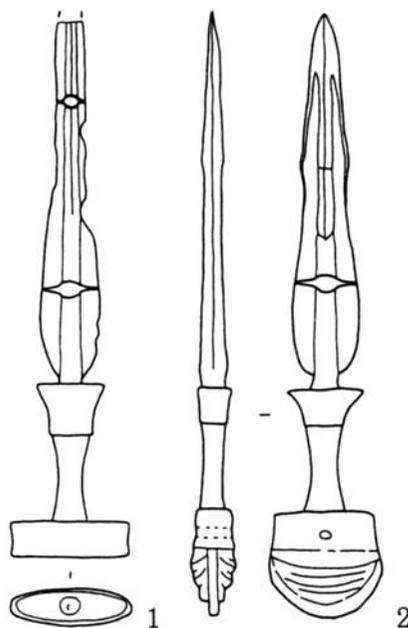
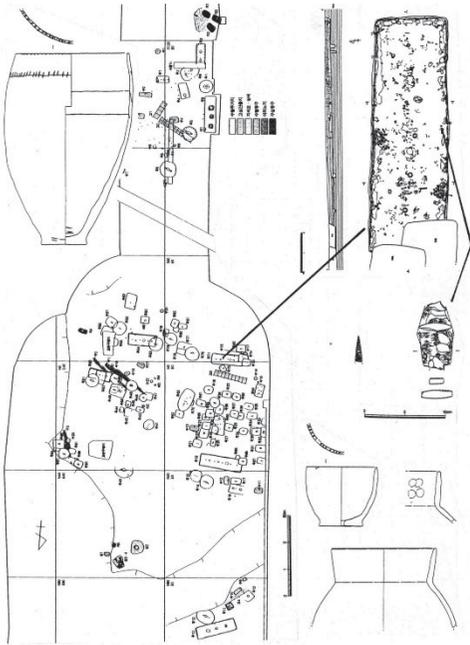


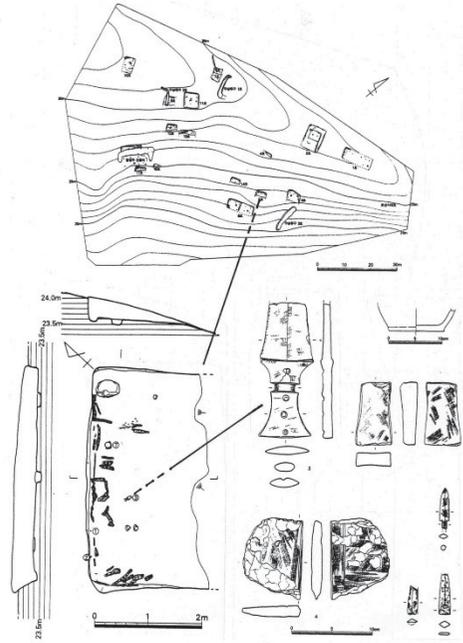
図 2 小黑石溝 8501 墓出土銅剣

### (2) 浦項 草谷里遺跡 (嶺南文化財研究院 2000) (図 3)

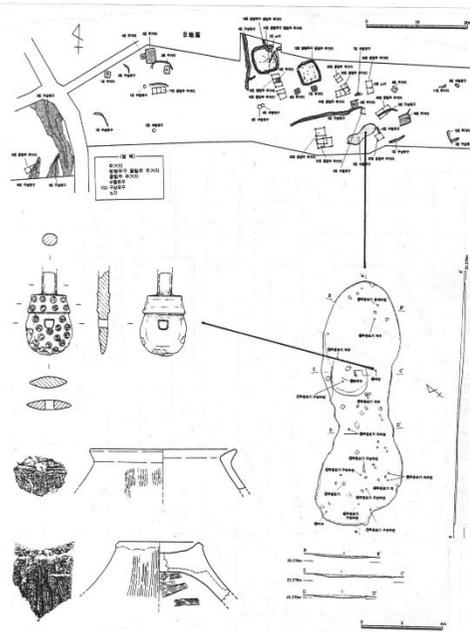
装飾石剣が出土した 5 号住居址は、規模が全長 420cm、残存幅 255cm、深さ 36cm であ



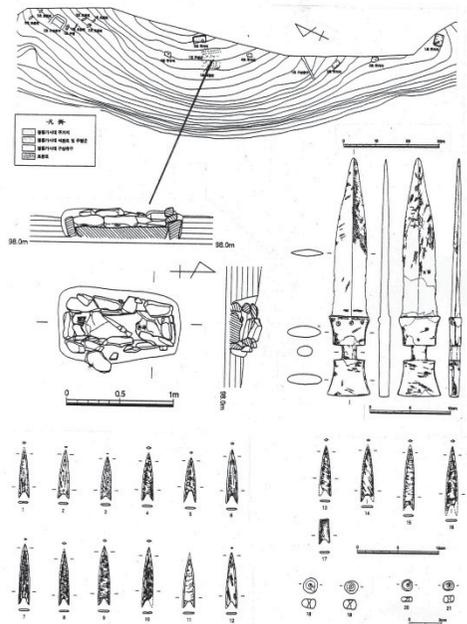
清道 陳羅里遺跡



浦項 草谷里遺跡



慶州 下西里遺跡



慶州 月山里遺跡

図3 清道 陳羅里、浦項 草谷里、慶州 下西里、慶州 月山里遺跡

る。南斜面が流失しているが6柱式と推定される。内部から多量の木炭が出土していることから火災による廃棄と推定される。住居址の規模や立地からは特別な差別性は見られない。装飾石剣は住居址の床面から穴が陰刻された面が上を向いて身部の1/2以上が欠損した状態で出土した。石剣の法量は長さ8.1cm、幅4.5cm、厚さ1.7cm、重さ98gである。岩質は玄武岩質と報告されている<sup>(5)</sup>。住居址の火災の要因が人為的なものであるかは不明であるが、石剣が毀損された状態で出土していることから住居址が廃棄された際、内部に流入した可能性が高い<sup>(6)</sup>。最近、蔚山地域で集中的に確認されている住居址の廃棄儀礼のような様相(金賢植 2005)と理解できるかも知れない。いずれにせよ、この石剣も清道陳羅里遺跡、蔚州九秀里遺跡のように実生活で用いたものを意図的に廃棄したものと推定される。

### (3) 慶州 下西里遺跡(東国大学校慶州キャンパス博物館 2004)(図3)

装飾石剣は5号堅穴から出土した。堅穴の平面形態は瓢箪形を呈する。規模は長さ12.2m、幅2.6~4.2m、深さ5~20cmである。内部は有機物を多量に含む黒色の粘質土が堆積していたとされる。内部の床面が平坦でなく、平面形態が不定形を呈する点と遺物が床面から浮いた状態で出土している点などから廃棄場と推定されている。この遺構からは無文土器片と弥生土器が出土したが、この堆積土内から装飾石剣が確認された。報告者はこの遺構について廃棄場と推定しているが、床面が一定しておらず遺物が破片で出土する不定形の堅穴を祭祀遺構と関連するものと見る研究がある(金斗喆 2000)。ところで、この遺構は無文土器と弥生土器が相伴していることから多少時期が新しくなるものであり、二段柄

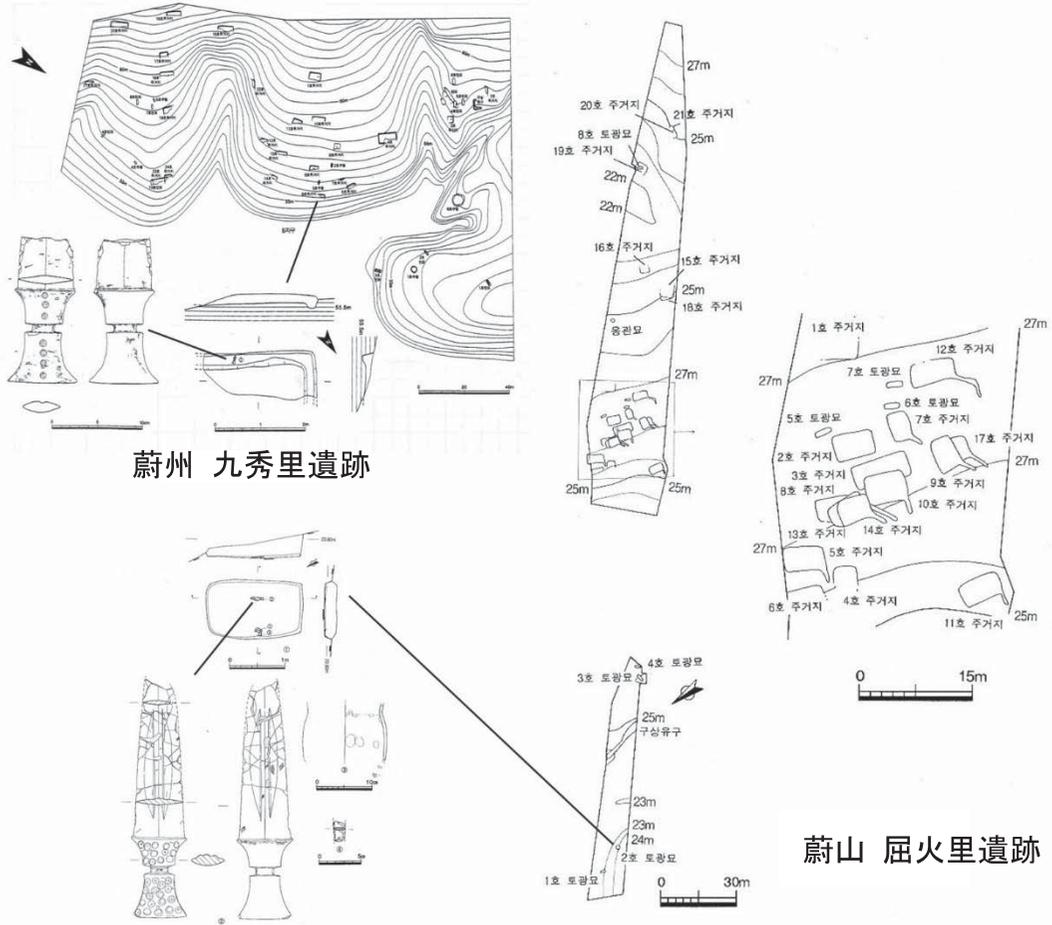
式石剣とは時間的な違いがある。おそらく遺跡周辺で採集したものをここに再投入したものと推定される。

### (4) 慶州 月山里遺跡(嶺南文化財研究院 2006)(図3)

装飾石剣は丘陵の稜線部に位置する1号石棺墓から出土した。石棺墓の周辺には10×10mの柱穴群が位置するが、報告者は石棺墓と関連する建物址(祭壇)と関連があるものと推定している。石棺墓の規模は長さ114cm、幅69cm、最大の深さ23cmである。石棺内部からは装飾石剣が床面中央に置かれたまま出土した。剣は3等分に割れた状態であり、小穴が陰刻された柄部が床面を向いて出土した。このような状況から石剣を折った状態で被葬者の下に副葬したものと推定される。石剣の法量は全長30.1cm、身部長20.1cm、柄部長10cm、身部幅4cm、柄部幅3.8~5.4cm、段部厚さ1.4cm、重さ164gである。岩質は泥岩ホルンフェルスである。穴は柄部の上段に横方向へ等間隔に3つ陰刻されている。このほかに短壁側で無茎式石鏃17点と玉4点が相伴している。

### (5) 蔚州 九秀里遺跡(蔚山発展研究院文化財センター 2004)(図4)

装飾石剣はB地区の6号住居址から出土した。6号住居址は丘陵の稜線部に立地しているが、大部分流失した状態で全体的な規模は不明である。住居址の残存規模は長さ260cm、幅110cm、最大の深さ18cmである。装飾石剣は身部が欠損した状態で、穴が陰刻された面が上を向いて出土した。石剣の法量は長さ10.3cm、幅4.1~7.6cm、厚さ1.2cmである。岩質は泥岩ホルンフェルスである。装飾石剣の全体的な法量および出土様相が浦項草谷里遺



蔚州 九秀里遺跡

蔚山 屈火里遺跡

図4 蔚州 九秀里遺跡、蔚山 屈火里遺跡

跡と酷似する。この石剣もやはり実生活で用いたものを住居跡が廃棄される際、意図的に投入した可能性がある<sup>(7)</sup>。

(6) 蔚山 屈火里遺跡 (中央文化財研究院 2006) (図4)

この遺跡は蔚州九秀里遺跡から東に約 9 km 離れた地点に位置する。遺跡は南から太和江に向けて北側に伸びる海拔 27m 前後の低い丘陵地に形成されている。この遺跡の遺構配置図を参照にすると、住居地域と墳墓地域に区分され、裝飾石剣は墳墓地域の 2 号土壙墓で赤色磨研土器の胴体部片、三角湾入鍬の身部

片と相伴している。出土状況の写真と図面を参照すると、埋納当時約 3 等分に毀器されたものと推定される。小穴は柄部の一方面にのみ円形で陰刻されているが、柄上段部に横 3 列、下段に横 5 列になっている。法量は長さ 28.3cm、幅 5.6cm である。

(7) 李養濬蒐集遺物 (国立慶州博物館 1987) (図5-1・2)

この裝飾石剣 2 点は李養濬博士が蒐集した遺物で、国立慶州博物館に展示されている。詳しい出土地域は不明であるが、氏の居住地から考えると、嶺南地方を大きく外れないと

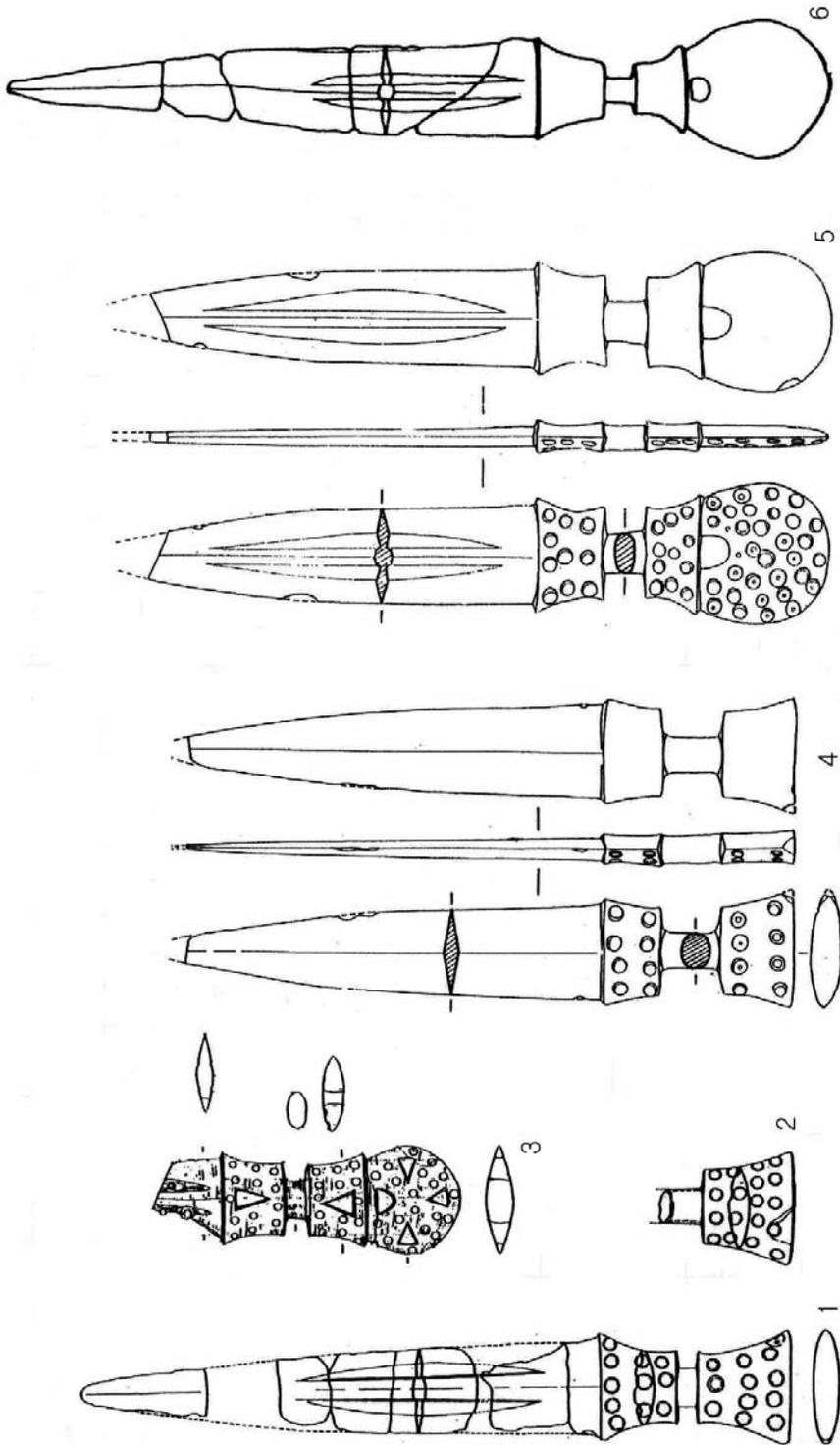


图5 李養璿收藏品 (1・2)、啓明大所藏品 (3)、義昌 平城里 (4・5)、彦陽 東部里 (6) 出土裝飾石劍

考えられる<sup>(8)</sup>。図5-1はほぼ完形で剣身の中間部分が部分的に欠失している。石剣の法量は全長38.7cm、身部長28.3cm、柄部長10.4cm、身部幅4.8cm、柄部幅4.0~6.2cmである。図5-2は柄下部のみ残存する。石剣の残存法量は柄部幅4.0~6.2cmである。岩質は泥岩ホルンフェルスと推定される。

(8) 啓明大学校行素博物館所蔵遺物<sup>(9)</sup>(図5-3)

この遺物は啓明大学校博物館が購入したものであるという。出土地など詳しい情報が不明である点が残念である。しかし、この遺物も慶尚北道地域一帯で収集されたものと推定される。装飾石剣の剣身上部は欠損した状態であるが、残存する剣身の先端部も磨研されている点から副葬用というよりは住居址で出土した可能性が高い。この石剣の特徴は折れた身部を再加工して磨研しているという点である。これは剣身が折れた後も石剣が持つ意味はそのまま維持されていたことを示唆するものと推定される。装飾的な側面においてこれまで出土した装飾石剣の中で最も華麗である。石剣の法量は残存長16.8cm、柄部長13.0cm、把頭部5.9cmである。岩質は泥岩ホルンフェルスである。

(9) 義昌 平城里遺跡(沈奉謹1984)(図5-4・5)

平城里遺跡は慶尚南道義昌郡(現:昌原市馬山会原区内西邑)平城里テドンコルに位置する。この遺物は正式な調査で確認されたものではなく、1971年に起きた山崩れの時に露出したものが住民によって収集・申告されたものである。周辺で石棺墓が破壊されているという点から副葬品が山崩れによって搬出されたものと推定される。住居址出土の装飾石

剣が全て剣身が欠損した状態、石棺墓出土のものがほぼ完全な状態である点を考慮すると、ここから出土した石剣も石棺墓に副葬されたものとするのが妥当であろう。図5-4は残存長33.7cm、柄部長10.5cm、身部幅5.3cmである。図5-5は4等分になったものを復元しているが、切先は欠損している。残存長38cm、柄部長16.4cm、身部幅5.3cm、把頭部幅7.8cm、厚さ1.0cmである。岩質は灰青色砂岩系統であるとされているが、一般的に砂岩は灰青色を呈しない。したがって、大部分の磨製石剣が泥岩ホルンフェルスまたは泥岩で製作された点を考慮すると、この石剣もホルンフェルス系統であると推定される。

(10) 彦陽 東部里出土品(有光1959)(図5-6)

詳しい出土状況に関する情報がなく石室内部と記録されている点からみて、彦陽一帯に分布する支石墓と関連した下部施設から出土した可能性が高い。剣身は4等分に割れている。石剣の法量は長さ45.6cm、身部長29.2cm、柄部長16.4cm、把頭部幅7.6cmである。

以上のように、装飾石剣は主に住居址と墳墓から出土していることが分かる。この中で住居址では剣の身部が欠損して出土し、墳墓からは完形あるいは2~5等分に毀器された後に埋納される様相が確認される。しかし、装飾石剣が出土する住居址や墳墓と他の遺構との間には立地や規模面において明瞭な差別性は見いだせない。

### 3. 型式分類および段階設定

#### (1) 型式分類

装飾石剣は身部に血溝があるものとなないものに大別されるが、本稿ではこれを系統差と認識することにしよう。つまり、I類は身部に

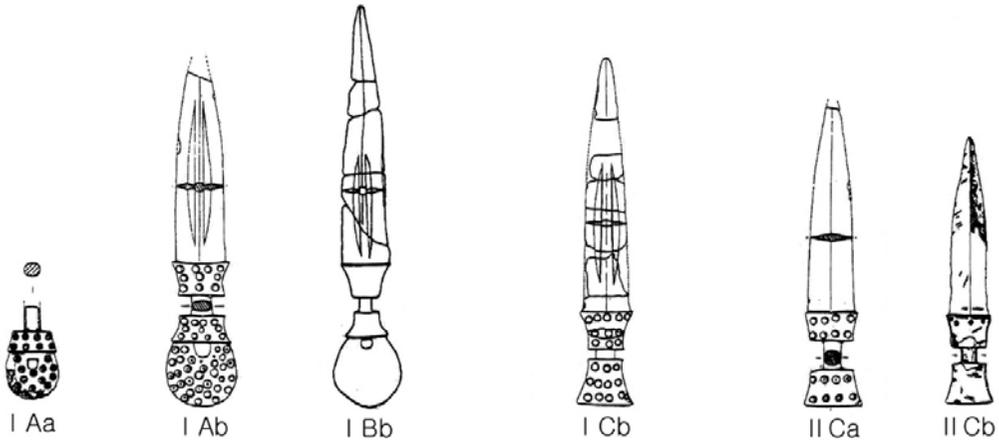


図6 装飾石剣の型式分類

血溝がある系統、Ⅱ類は身部に血溝がない系統である<sup>(10)</sup>。

次に詳細な属性においては、把頭があり小穴があるものがA、把頭があり小穴がないものがB、把頭がないものがC、柄部の側面が直線をなすものがa、曲線をなすものがbである。柄部から段部の長さは長いものが古式に設定される。

I Aa類は柄部に把頭部があり、柄部の側面が直線をなす<sup>(11)</sup>。

I Ab類は柄部に把頭部があり、柄部の側面が曲線をなす。

I Bb類はI Ab類と類似するが、柄部と把頭に小穴の装飾がない。

I Cb類は把頭部が脱落した型式である。

ⅡCa類は無血溝式で柄部の側面が直線をなし段部が長い。

ⅡCb類は無血溝式で柄部の側面が曲線的である。

この他に小穴の文様帯が時間性を反映するものと考えられるが、このような問題は次章

で具体的に検討することにしてしよう。

## (2) 段階設定

装飾石剣は小穴と把頭があることを除くと二段柄式石剣と同一の型式である。磨製石剣の型式分類はこれまで幾人もの研究者によってなされているが、これら二段柄式石剣と装飾石剣は青銅器時代前期に編年されることが一般的である。また、装飾石剣と共伴する遺物も口唇刻目短斜線文土器、孔列土器、無茎式石鏃、二段茎式石鏃などでやはり青銅器時代前期であることが分かる<sup>(12)</sup>。

装飾石剣の下限は安在皓分類のⅠ段階(安在皓1990:78)、沈奉謹分類のⅡa段階(沈奉謹1989:3~7)、朴宣映分類のⅠ期(朴宣映2004:35)を下らない。したがって、装飾石剣は青銅器時代前期を下らないものと見ることができ、この時期に限定的に製作されたことが分かる。このような型式別分類によって段階を設定すると図7のとおりである。

Ⅰ段階は柄部の段部、柄上部、柄下部の比率がおおよそ1:1:1と長く、柄上部と柄下部の側面が直線的なものである。型式上では慶

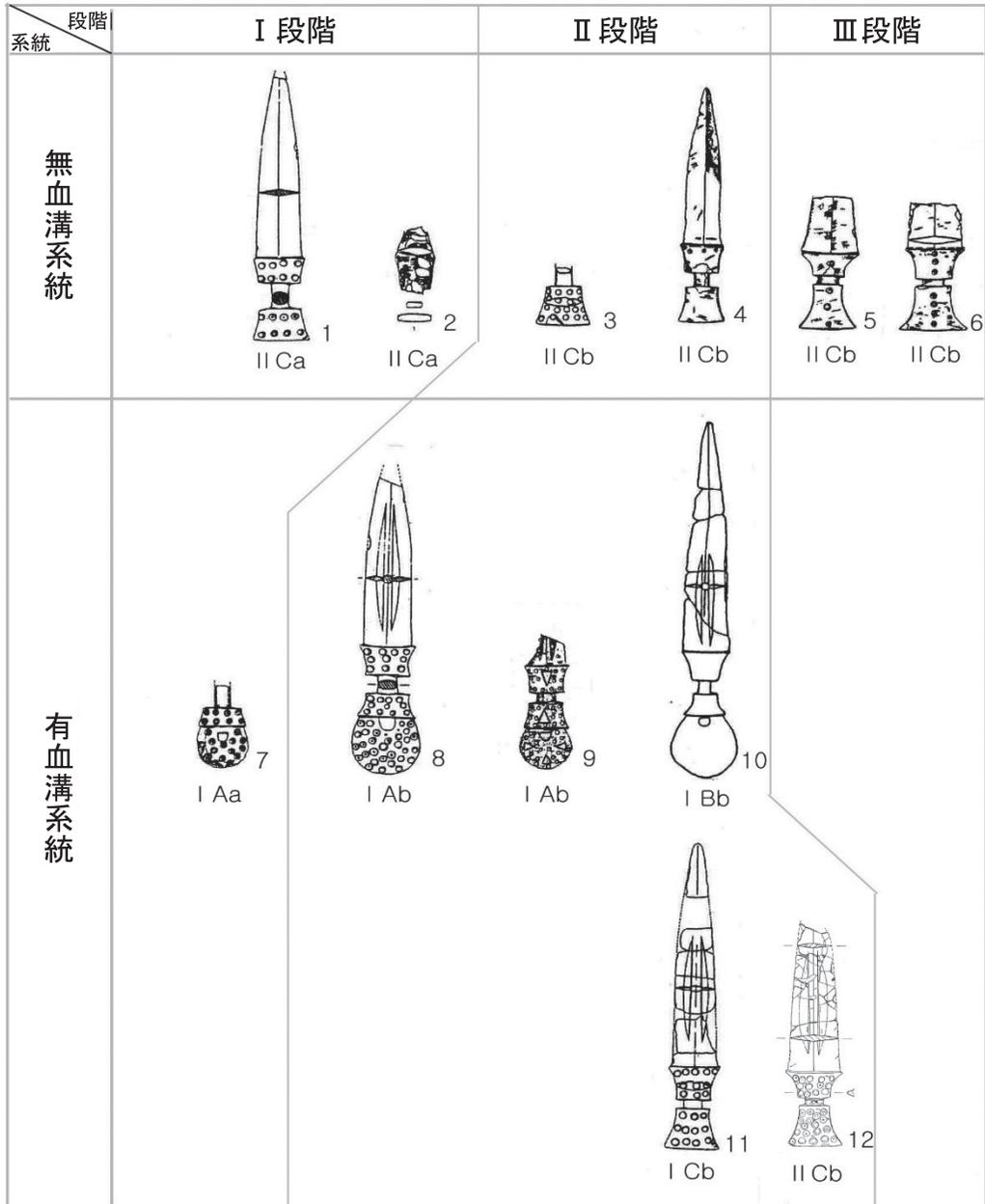


図7 裝飾石劍の系統および段階別配置図

1：平城里、2：陳羅里、3：李養璿収集、4：月山里、5：草谷里、6：九秀里、7：下西里  
8：平城里、9：啓明大所蔵、10：東部里、11：李養璿収集、12：屈火里

州陽南下西里出土品（図7）が最も古式と想定される。この段階で共伴遺物が分かるものが清道陳羅里遺跡である（図3）。この遺跡では

口唇刻目二重口縁短斜線文土器が出土しているが、このような形態は青銅器時代前期後半に該当する<sup>(13)</sup>。したがって、I段階は裝飾石劍

の発生期で館山里式住居址段階に該当し、青銅器時代前期前半～前期後半の古い時期と想定される。

Ⅱ段階は装飾石剣の盛行期で、柄部の段部がⅠ段階より短くなり、柄上部と柄下部の側面が曲線に変化する。この段階の指標として慶州月山里遺跡出土品(図3・7)を挙げることができるが、この遺跡では無茎式石鏃が共伴しており、周辺の住居址では孔列土器が出土している。これまでⅡ段階の遺物と直接共伴した住居址はないが、館山里式住居址の新しい段階から長方形住居址の導入段階と想定しておくこととし、今後の資料増加に期待したい。

Ⅲ段階は装飾石剣の退行期で柄部の段部が1.5cm以内と短くなり、柄上部と柄下部側面の曲りが大きくなる。おそらく装飾的な側面が強調されたものと推定される。これまでの資料からみると、この段階から柄部の把頭が消滅するものと推定される。小穴の文様帯も縦的な配置に変化する。浦項草谷里遺跡(図3・7)と蔚州九秀里遺跡(図4・7)出土品が指標である。浦項草谷里遺跡の共伴遺物である石鏃から見ると、青銅器時代前期後半～後期で長方形住居址および方形住居址段階に設定できる。

以上で装飾石剣を2つの系統に区分して型式の変化を調べた後、段階設定を行った。次に装飾石剣の最も重要な特徴である小穴の文様帯の配置状態について調べてみよう。結論から言うと、小穴の横配置(現在2列が最古式)は徐々に増加した後減少し、横配置中心から縦配置に変化するのである。このような変化から小穴の横配置増加は段部が短くなるとともに小穴を刻む面積が広がったためであると考えられる。しかし、増加した横列は

その後減少し、九秀里、草谷里遺跡出土品のように縦配置中心に転換するものと判断される<sup>(14)</sup>。

## 4. 装飾石剣の社会的意味

### (1) 特徴

装飾石剣を特徴別に要約すると以下の通りである。

\* 全て二段柄式石剣である。

装飾石剣は二段柄式石剣が製作される青銅器時代前期にのみ限定的に製作・使用されたものと考えられる。柄部の製作が困難であるにもかかわらず二段で構成されていることは青銅剣の柄部を模倣した可能性と佩用のための挟りと推定される。

\* 柄部と把頭に円形の小さな装飾が陰刻されており、半円形、三角形などの装飾が透孔されたものもある。小穴が単純な装飾なのか、それ以上の意味を内包するののかについては次章で検討してみよう。

\* 円形の小さな装飾は柄部の片面にのみ陰刻されている。

把頭部がある石剣で半円または三角形の文様が透孔されているものを除くと、円形の小さな装飾は石剣の片面にのみ刻まれている。これは佩用と関連するものと推定される。佩用は身体への日常的佩用と儀礼時の佩用に区分できる。身体への佩用時には石剣の見える面が一方の面だけであるため、敢えて両面に装飾を施す手間を省いたものと推定できる。次は儀礼と関連した佩用であるが、祭壇などにかけてたり供物に挿入した時に人々に見えるようにするためのものと推定される。この場合は文様が片面にのみあることから、祭壇を中心に一方の方向でのみ儀礼が執り行われたものと推定される。

\* 小穴装飾は左右対称の様相を見せる。こ

れまで確認された資料によると、製作時に小穴の位置を間違えたため位置を変更したものと見られるものもあるが(図面5-3・5)、大部分の小穴は一度に企画・製作されたものと推定される。

\* 石剣の出土様相は全て破損されたり身部が欠損した状態である。

このような出土様相について意図的なものと把握して次章で検討してみよう。

## (2) 空間的位置

装飾石剣が出土した地域を整理してみると図8のとおりである。おおよそ慶州を中心に嶺南地方に集中的して分布する様相を見せる。このような分布様相はいくつかの可能性を示唆する。まず、装飾石剣の発生は朝鮮半島南部地域の青銅器時代文化が形成された後、地域的に発展した独特の石剣文化と推定される。

ところで、装飾石剣の分布圏は嶺南地方の岩刻画の分布圏と同じであり、これと関連する可能性を示唆している<sup>(15)</sup>。岩刻画との相関関係は意味の検討において言及しよう。

## (3) 出土様相

装飾石剣は遺跡の検討で調べたように主に住居址と墳墓から出土する。

装飾石剣は収集されたものまで合わせると13点である。このうち住居址出土品3点、墳墓出土品2点、堅穴出土品1点である。ところで、平城里出土品の場合、收拾された地域で石棺墓が破壊されていたと伝えられており、墳墓から出土した可能性が高い。また、住居址から出土した装飾石剣は全て身部が欠損した状態で出土することが特徴である。したがって、完形で收拾・収集されたものは墳墓出土品、破損した状態で収集されたものは住居址出土品としても良いだろう。これを整理した

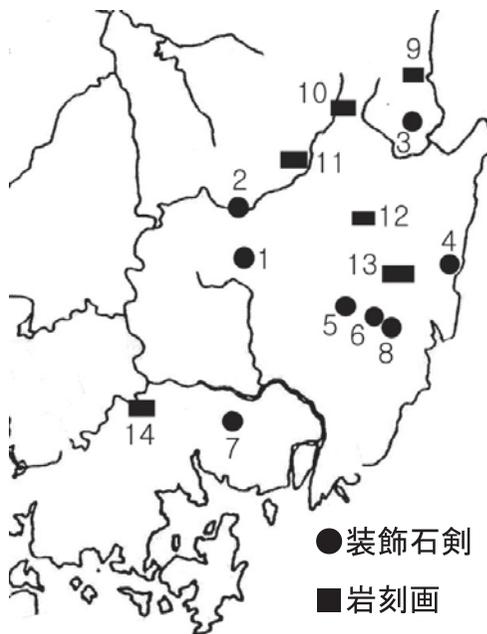


図8 装飾石剣の分布図

(1: 清道陳羅里、2: 慶山玉谷里、3: 浦項草谷里、4: 陽南下西里、5: 彦陽東部里、6: 蔚州九秀里、7: 義昌平城里、8: 蔚山屈火里、9: 迎日七浦里、10: 迎日仁庇里、11: 永川甫城里、12: 慶州金文台、13: 蔚山川前里・大谷里、14: 咸安道項里

ものが表1である。

ところで、これらの遺物の出土状態に注目する必要がある。それは全ての石剣の剣身がなかったり2等分以上に破損しているという事実である<sup>(16)</sup>。このように遺物を意図的に毀損する行為を毀器といい、北方民族の習俗として研究されている(張英1990)。朝鮮半島青銅器時代の遺跡から出土する遺物の毀器様相についても儀礼的な行為として把握され、概略的ではあるが検討されている<sup>(17)</sup>。

装飾石剣の毀器様相は多様である。完形の場合は剣身部が2等分または3等分されるものが多く、住居址出土品または收拾品の場合は剣身の3/4程度が毀器されて柄部のみ残す

表 1 装飾石剣一覧

番号	図	出土遺跡	出土遺構	出土状態
1	3	清道 陳羅里	住居址	柄部の一部のみ残存
2	4	蔚州 九秀里	住居址	剣身の半分以上欠損
3	3	浦項 草谷里	住居址	剣身の半分以上欠損
4	3	陽南 下西里	堅穴	柄の一部と把頭のみ残存
5	3	慶州 月山里	墳墓	完形、3等分
6	5	李養濬収集遺物	墳墓推定	完形、3等分以上
7	5	李養濬収集遺物	住居址推定	柄の一部のみ残存
8	5	啓明大学校所蔵	住居址推定	剣身の半分以上欠損
9	5	義昌 平城里	墳墓推定	完形、剣身2等分
10	5	義昌 平城里	墳墓推定	完形、剣身2等分
11	5	彦陽 東部里	墳墓	完形、剣身3等分以上
12		慶山 玉谷里	住居址	剣身の半分以上欠損
13	4	蔚山 屈火里	墳墓	剣身3等分

るものまたは柄部の下部のみ残存する形で確認される。これまでの資料からみると、墳墓に副葬される磨製石剣は慶州月山里遺跡(図3)、蔚山屈火里遺跡(図4)のように毀器後、再び並べて埋葬主体部内に副葬するものや、泗川梨琴洞遺跡のように毀器後、埋葬主体部外側の補強土に副葬するもの(慶南考古学研究所2003:157~169)などに区分される。住居址の場合は身部の一部が毀器されて柄部のみ出土する様相を見せる。おおよそ住居址の廃棄段階に入れられたものと推定される。このような毀器様相は青銅器時代全般にわたって石器、土器などで確認されるもので、既存の見解のように儀礼と関連する行為と見ることができる。

#### (4) 意味

実際、ある遺物を通して意味を推定することは多少形而上学的な問題に陥る可能性が高い。しかし、遺物が持つ機能的な意味だけでなく象徴的な意味を考察し、地域間の文化様相の違いや背景、地理的環境、社会の発展段階など多角的な側面からの研究を通して当時

の文化と社会相を明らかにしようとする努力がなされなければならないだろう(李栄文1997)。前章で調べたように装飾石剣から直接的に看取されるのは意図的な毀器の様相である。これは儀礼と関連する可能性が高いと推定してみた。ならば、このほかに装飾石剣はどのような意味を内包しているのか。装飾という要素は単純に飾るという意味であるが、身分を示す意味としても使われる(李漢祥2004)。それほど剣は特別で神聖視される品物であったと考えられる。朝鮮半島の青銅器時代社会において石剣は権威と身分的な意味を内包したと先学たちによって指摘されてきた。ゆえに死者の墓で主に出土する石剣は身分と無関係ではないことが分かり、同時に崇拜の対象であったことを推定できる。このような可能性を積極的に裏付ける手がかりが迎日仁庇里支石墓(国立慶州博物館1985)と麗水五林洞支石墓(李栄文・鄭基鎮1992)の上石に刻まれた石剣である(図9)。この岩刻画の石剣のうち、特に慶尚北道迎日郡杞溪面仁庇里のものに注目する必要がある。仁庇里には支石墓群が存在しているが、これらの中で16号

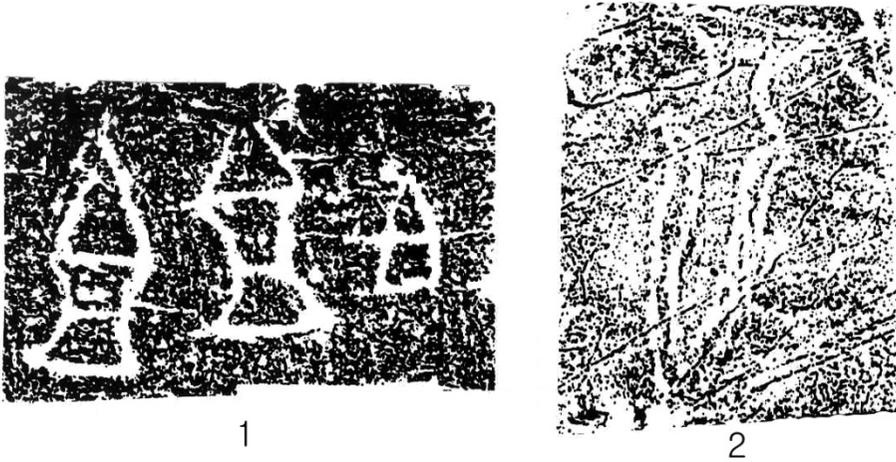


図9 支石墓の上石に岩刻画で表現された石剣 1(仁庇里)、2(五林洞)

支石墓の上石に磨製石剣2点と石鏃と推定される文様1点が線で陰刻されている(国立慶州博物館1985)。この中で2つの石剣は比較的详细に描写されており、2点とも二段柄式石剣で柄部の上段に2つの穴が陰刻されている装飾石剣である。つまり、この支石墓に陰刻された装飾石剣は儀礼または崇拜の対象である可能性が高いことが分かる。したがって、装飾石剣もこのような性格を有すると推定される。また、この石剣は剣身に比べて柄部が大きく強調された点の特異であるが、住居址から出土した石剣が身部が欠損した状態で出土したり、身部が欠損した後にも再加工して使用した例があることは、身部が欠損して柄部のみ残存したとしても、その意味が依然として維持されていたことを示唆するものと考えられる。

ところで、石剣形態の岩刻画が変化し、嶺南地方で確認されている幾何学文の岩刻画文様に変化・発展するという宋華燮の論考が興味深い。氏は磨製石剣と石鏃が権威を象徴するものと把握し、嶺南地方で確認される幾何

学的文様の岩刻文様が石剣と石鏃から変化したと把握している(宋華燮1994)。しかし、この石剣の文様がどこに起源するかについては言及しておらず、ただ岩刻画の伝播と意味に対する見解のみ提示した。これは当時の資料的な限界のためであると考えられる。筆者はこのような幾何学的文様が石剣文様の岩刻画から変遷したという宋華燮の見解に同意しながらその起源は装飾石剣にあることを提示することにしよう。その理由としてはすでに言及されているように仁庇里支石墓の上石に刻まれた二段柄式石剣が装飾石剣をモチーフに製作されたことが確実であるためである。ならば、仁庇里支石墓の上石に装飾石剣が刻まれた時期はいつごろであろうか。仁庇里支石墓の上石に刻まれた石剣の柄上段の文様を一例二穴と見た場合、縦単位に変化する前段階の型式であり、慶州月山里出土石剣と最も類似すると推定される。したがって、慶州月山里遺跡段階(図7)つまり、装飾石剣Ⅱ段階の後半から岩刻画に刻まれはじめるものと推定され、この段階から埋葬儀礼において石剣の

重要性が強調されはじめたとみることができよう。

最後に装飾石剣とそこに刻まれた穴の関係について調べてみる。穴は青銅器時代の支石墓などで確認されている性穴<sup>(18)</sup>と形態的に類似しており、支石墓にも刻まれるなど装飾石剣との関連性が予想される<sup>(19)</sup>。つまり、銅剣で見られなかった小穴が石剣に刻まれるようになることは単純な装飾以外に性穴のような意味が結合した可能性があるものと推定される<sup>(20)</sup>。

## VI. 結語

以上で朝鮮半島青銅器時代の磨製石剣のうち、柄部に把頭が附着したり円形の半透孔装飾がある石剣を装飾石剣と命名し、これについて検討してみた。その内容を要約すると以下の通りである。

装飾石剣は全て二段柄式で青銅器時代前期の磨製石剣出現期の文化と関連あるものと推定される。分布は主に嶺南地方であり、この地域における岩刻画の分布範囲とほぼ一致し、これと関連があることを推定した。

出土様相については住居址、墳墓などで出土するが、一部は堅穴からも出土する。装飾石剣は大部分人為的毀器の様相を見せるが、これは儀礼と関連するものと推定される。また、岩刻画に刻まれた装飾石剣からそれが内包する意味が崇拝の対象であったことが分かった。最後に装飾石剣に刻まれた小穴について性穴のような意味と把握し、銅剣を模倣した磨製石剣の意味と性穴の意味が結合した可能性を提示した。

## 参考文献 (カナダラ順)

- 慶南考古学研究所 2003『泗川梨琴洞遺跡』  
国立慶州博物館 1985「月城郡迎日郡地表調査報告書」『国立博物館古蹟調査報告書』第17冊  
国立慶州博物館 1987『菊隱李養濬蒐集文化財』  
金邱軍 1996「韓国式石剣の研究 (1)」『湖岩美術館研究論文集』1 湖岩美術館  
金元龍 1971「韓国磨製石剣の起源に関する一考察」『白山学報』10 白山学会  
金昌鎬 1981「有柄式石剣形式分類試論」『慶北大学校師範大学歴史教育論集』2  
金賢植 2005「無文土器時代住居址内部の積石現状と意味」『嶺南考古学』37  
金斗喆 2000「祭祀考古学の研究成果と課題— 堅穴式儀礼遺構を中心に—」『考古学の新たな志向』第4回釜山福泉博物館学術発表会  
金用珩 1964「我が国の青銅器時代の年代論と関連した諸問題」『考古民俗』2 社会科学院出版社  
東国大学校慶州キャンパス博物館 2004『陽南下西里遺跡』  
朴宣映 2004「南韓出土有柄式石剣研究」慶北大学校碩士学位論文  
朴竣範 1998『漢江流域出土石鏃に対する研究』弘益大学校教育大学院碩士学位論文  
裴眞晟 2006「石剣出現のイデオロギー」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』  
孫峻鎬 2005「磨製石器使用痕分析の現況と韓国における展望」『湖西考古学』21  
孫峻鎬 2006『韓半島青銅器時代磨製石器研究』高麗大学校博士学位論文  
宋華燮 1994「先史時代岩刻画にあらわれた石剣・石鏃の様式と象徴」『韓国考古学報』31 韓国考古学会  
沈奉謹 1984「密陽南田里と義昌平城里遺跡出土遺物」『尹武炳博士回甲紀念論叢』

- 沈奉謹 1989 「日本弥生文化初期の磨製石器に対する研究—韓国の磨製石剣と関連して—」『嶺南考古学』6
- 安在皓 1990 『韓国前期無文土器の編年—嶺南地方の資料を中心に—』慶北大学校考古人類学科硕士学位論文
- 安在皓 1996 「無文土器時代聚落の変遷—住居址を通した中期の設定—」『碩晤尹容鎮教授停年退任記念論叢』
- 安在皓 2006 『青銅器時代聚落研究』釜山大学校考古学科大学院博士学位論文
- 嶺南文化財研究院 2000 『浦項草谷里遺跡』
- 嶺南文化財研究院 2005 『清道陳羅里遺跡』
- 嶺南文化財研究院 2006 『慶州月山里山 137-1 番地遺跡』
- 蔚山発展研究院文化財センター 2004 『蔚州九秀里遺跡』
- 李相吉 2000 『青銅器時代儀礼に関する考古学的研究』大邱暁星カトリック大学校大学院博士学位論文
- 李栄文 1997 「全南地方出土磨製石剣に関する研究」『韓国上古史学報』24
- 李栄文・鄭基鎮 1992 『麗水五林洞支石墓』全南大学校博物館
- 李漢祥 2004 『黄金の国新羅』キムジョン社
- 任世権 1977 「我が国磨製石剣の研究」『韓国史研究』17 韓国史研究会
- 全栄来 1976 「完州上林里出土中国式銅剣に関して」『全北遺跡調査報告』6 全州市立博物館
- 全栄来 1982 「韓国磨製石剣・石剣の編年に関する研究」『馬韓・百濟文化』4・5 円光大学校馬韓百濟文化研究所
- 中央文化財研究院 2006 「蔚山屈火里・栗里遺跡』
- 崔盛洛 1982 「韓国磨製石剣の考察」『韓国考古学報』12 韓国考古学会
- 黄昌漢 2004 「無文土器時代磨製石剣の製作技法研究」『湖南考古学報』20
- 近藤喬一 2000 「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史』資料編考古1
- 有光教一 1959 『朝鮮磨製石剣の研究』京都大学文学部考古学叢書第二冊
- 田村晃一 1988 「朝鮮半島出土の磨製石剣について」『MUSEUM』24 東京国立博物館
- 張英 1990 「縦考古学看我国東北古代民族毀器習俗」『北方文物』1990-3 期
- (原文：黄昌漢 2008 「青銅器時代装飾石剣の検討」『科技考古研究』第 14 号 亜洲大学校博物館 pp. 33-53)
- 本稿の翻訳および関連資料の調査において、平成 25 年度公益財団法人韓昌祐・韓哲文化財団助成金『韓半島出土磨製石剣の集成的研究』から支援を受けた。

- (1) 朝鮮半島青銅器時代の研究は主に編年および系統研究を中心に行われてきた。したがって、編年と系統を把握するための主要対象として土器に対する研究が集中的に行われ、石器はそのための補助的な資料であるという認識が強いようである。
- (2) 本稿で把頭式石剣を装飾石剣に含めたのは、銅剣より把頭部分が誇張して表現された点に見られるように、把頭部分の装飾的で意味的な側面が強調されたものと見ることができるためである。また、大部分の把頭式石剣には小穴が陰刻されている。
- (3) 磨製石剣の祖型に対する研究史は孫峻鎬によって詳しく整理されている。参照されたい。孫峻鎬, 2006, 『韓半島青銅器時代磨製石器研究』高麗大学校博士学位論文、pp3~9。

- (4) 裴眞晟は石剣の形態変化が「複雑」から「単純」になる点は、初現期の石剣が何らかの模倣に忠実であったためであり、その対象は銅剣である可能性が高いと指摘している。裴眞晟, 2006, 「石剣出現のイデオロギー」, 『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』, pp207
- (5) 草谷里から慶州方面へ国道7号線を10kmほど進むと威徳大学に至る。ここからさらに慶州方面に2kmほど進むと、粗面玄武岩の柱状節理が露出している。玄武岩質はおそらくここで産出する粗面玄武岩であると推定される。
- (6) 青銅器時代の遺物毀器は墳墓だけでなく、住居址など多様な空間で確認されている。これについては今後検討することとした。
- (7) 蔚山地域の青銅器時代住居址の積石現象について儀礼的な行為と把握した見解がある。このような積石の間からは儀礼的な廃棄と考えられる遺物が確認される。(金賢植 2005)
- (8) 李養璿博士は大邱に居住しており、収集遺物の大部分は嶺南地方で出土したものとされる。
- (9) この遺物を実測できるようご配慮してくださった啓明大学校行素博物館の関係者の方々に感謝する。
- (10) 石剣が銅剣を模倣したことが認められれば、血溝があるものが銅剣を忠実に模倣したと見られるため、血溝式が無血溝式より先行するものと推定される。
- (11) 現在、この型式に含まれる確実な資料はない。しかし、これまでの資料から見ると把頭があるものは全て血溝があるため、下西里出土品(図3)をこの型式に設定しても良いと判断される。

- (12) 朝鮮半島青銅器時代の時期区分は安在皓の論考に従う。

	青銅器時代				三韓 前期
	早期		前期	後期	
標準 土器	二重口縁 土器	突帯文土 器	可楽洞系, (駅三洞系) 欣岩里系土 器	松菊里系 土器 椀丹里式 土器など	粘土帶土 器
既存 の 段階	末期	早期	前期	中期	後期
	新石器時代	無文土器時代・青銅器時代			

安在皓, 2006, 『青銅器時代聚落研究』, 釜山大学校考古学科大学院博士学位論文, pp8~20

- (13) 安在皓(2006:18)は青銅器時代前期後半の基準を口唇刻目文が出現する時点とした。
- (14) 現時点では時間的な変化によるものと判断されるが、地域的な違いであるかも知れない。今後、資料が増加すれば明確になるものと期待される。
- (15) 今後資料が増加すれば多少分布圏が拡大する可能性はあるが、嶺南地方を大きく外れないものと判断される。
- (16) 遺構に埋納された遺物が土圧やその他の物理的作用によって破損した可能性も高いが、すべての遺物に共通して同じ現象が見られることは注意する必要があると考えられる。
- (17) 李相吉は青銅器時代の儀礼全般に対する資料を検討して研究の基盤を築いた。李相吉, 2000, 『青銅器時代儀礼に関する考古学的研究』, 大邱暁星カトリック大学校大学院博士学位論文。
- (18) 性穴(cup-mark)という用語が意味的に象徴できる範囲を縮小しており、残念であるがひとまず既存の用語を用いることにしよう。
- (19) 性穴は朝鮮半島のみならず、ヨーロッパ、

中央アジア、シベリアなど世界各地で確認されており、世界共通の文化遺産であるといえる。性穴の意味は地域ごとに違いはあるが、一般的に祈子信仰の意味または豊饒を祈願するものとされている。朝鮮半島で性穴が作られはじめた時期を正確に把握することは難しいが、支石墓で多くの性穴が発見されることから青銅器時代に始まったものと推定されており、筆者もこれに賛同する。

(20) 性穴と装飾石剣に刻まれた小穴が意味的に相互に関連性があると考えられるが、どちらが先なのかは現在としては推定しにくい。したがって、既存の性穴文化が装飾石剣に移入された可能性もあるが、一方では装飾石剣の小穴から性穴に分離した可能性も想定しておく必要もあろう。この点は今後性穴に対する研究が進めば解決されるものと期待される。